

■ 概況

2/4~2/10のNYMEX・WTI先物市場は、56.23~58.68ドルの範囲で推移した。

2月11日は、この日発表のOPEC月報とIEA市場報告が2021年の石油需要を下方修正するなど、コロナ禍からの需要回復に時間を要するとの見方が広がり、9営業日ぶりに反落した。前日までの高値で、持ち高調整、利食い売りなどもあった模様。3月限の終値は前日比0.44ドル安の58.24ドル。

週末12日は、バイデン政権による大型追加経済対策への期待、さらに、イエメンの反政府武装組織フーシ派によるサウジの空港に対するドローン攻撃の声明発表で地政学リスクが認識され、大幅反落した。なお、米国内で稼働中の石油掘削装置は前週末比7基増の306基と12週連続の増加となった。3月限の終値は前日比1.23ドル高の59.47ドル。

15日は、ワシントン生誕記念日につき休場。

16日は、産油地帯であるテキサス州に寒波が襲来し、石油施設の稼働に供給制約が懸念されたこと、また、14日にサウジ主導の有志連合軍がイエメン・フーシ派のサウジ向けドローン攻撃を阻止したと発表され、改めて湾岸地域の地政学リスクが認識されたことから続伸、終値ベースで60ドル台に乗せた。ただ、OPECプラスの4月以降の協調減産緩和の観測報道後はやや弱含んだ。3月限の終値は前日比0.58ドル高の60.05ドル。

17日は、テキサス州への寒波襲来の影響で、石油施設に供給障害が発生したことで、3営業日続伸した。ただ、サウジが4月以降減産緩和を検討中との米紙報道で一時弱含んだ。なお、米国エネルギー情報局(EIA)の週間在庫報告は休日の関係で翌日の発表。3月限の終値は前日比1.09ドル高

の61.14ドル。

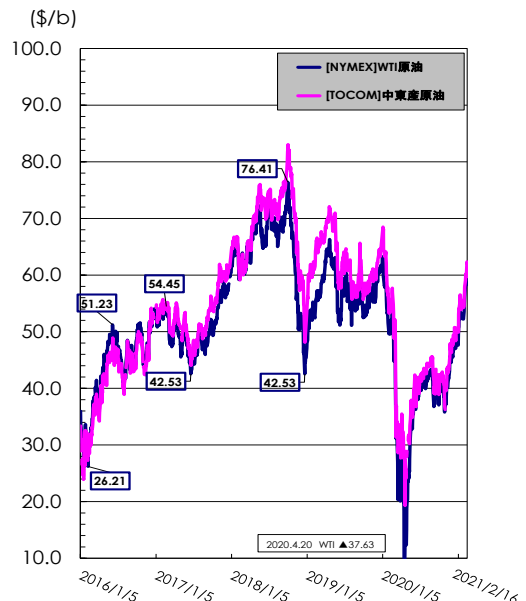
アジアの指標原油である中東産ドバイ原油/東京市場(4月渡し)は2月4日~10日の間58.30~60.80ドルの範囲で推移した。2月11日休場、12日60.10ドル、15日62.60ドル、16日62.50ドル、17日62.50ドルと推移した。

為替は2月4日~10日の間104.62~105.54円の範囲で推移した。2月11日休場、12日104.74円、15日105.12円、16日105.49円、17日106.17円で推移した。

財務省が2月17日に発表した貿易統計(速報・旬間)によると、1月下旬の原油輸入平均CIF価格は、33,516円/klで、前旬比763円高、ドル建て51.38ドルで前旬比1.05ドル高、為替レートは1ドル/103.69円。また、同日発表の貿易統計(速報・旬間)によると、1月の原油輸入平均CIF価格は、32,600円/klで、前月比3,487円高、ドル建て50.05ドルで前月比5.60ドル高、為替レートは1ドル/103.55円。

そのような中で、2月15日時点の小売価格は、ガソリンが前週(2月8日)比1.8円の値上がり、軽油も同1.7円の値上がり、灯油は24円の値上がり(18%ベース)だった。ガソリンは12週連続の値上がり、軽油も12週連続の値上がり、灯油も12週連続の値上がりだった。この週(2月第3週)の原油コストは大きく値上がりし、次週の元売の卸価格はガソリン・軽油・灯油ともに、全社、前週比1.5円の値上げとなった。

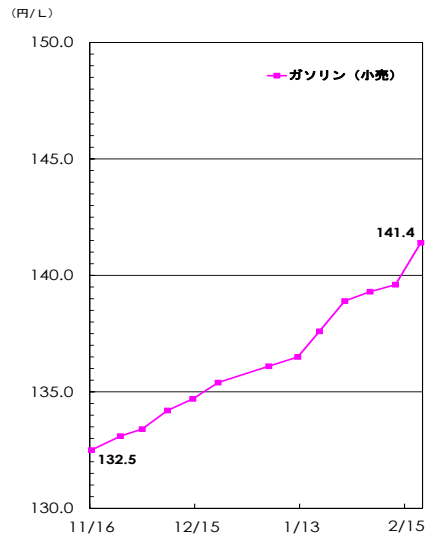
原油		今週	前週比	前年比
需給	原油処理量 (千kl)	2/7 ~ 2/13	2,978 ▲36	▼ -
	トッパー稼働率 (%)	"	77.4 ▲0.9	▼ -
	原油在庫量 (千kl)	2/13	10,436 ▼-684	▼ -
価格	中東産原油(TOCOM) (\$/bbl)	2/15	62.34 ▲3.28	▲ 6.7
	WTI原油(NYMEX) (\$/bbl)	2/16	60.05 ▲2.08	▲ 8.0
	原油CIF単価 (\$/bbl)	1月下旬	51.38 ▲1.05	▼ -18.95
	①原油CIF単価 (¥/kl)	"	33,516 ▲763	▼ -14,838
	②ドル換算レート (¥/\$)	"	103.69 ▼-0.25	▲ 5.62
	外国為替TTSレート (¥/\$)	2/15	106.12 ▲0.42	▲ 4.68



(単位: 千kl、円/%)

ガソリン		今週	前週比	前年比	
需給	生産	2/7 ~ 2/13	872 ▼ -5	▼ -	
	輸入	"	n.a. n.a.	n.a.	
	出荷	"	809 ▼ -78	▼ -	
	輸出	"	84 ▼ -19	▼ -	
	在庫	2/13	1,986 ▼ -21	▲ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	2/9 ~ 2/15	52.8 ▲ 1.6	▼ -1.0	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	2/9 ~ 2/15	51.2 ▲ 1.5	▼ -1.1
		(TOCOM/中部)	2/15	53.7 ▲ 2.1	▼ -0.5
	小売 [週動向] (資工庁公表)	2/15	141.4 ▲ 1.8	▼ -7.1	

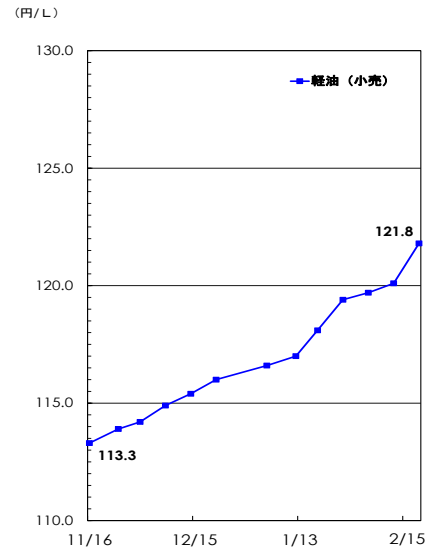
※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

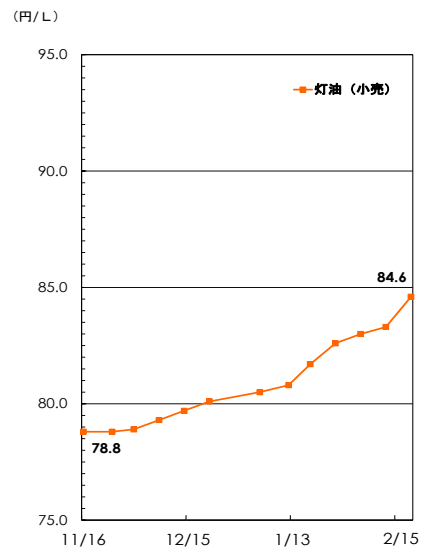
軽油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	2/7 ~ 2/13	679 ▲ 22	▼ -	
	輸入	"	n.a. n.a.	n.a.	
	出荷	"	603 ▼ -58	▲ -	
	輸出	"	69 ▲ 44	▼ -	
	在庫	2/13	1,595 ▲ 7	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	2/9 ~ 2/15	55.3 ▲ 1.7	▼ -2.7	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	2/9 ~ 2/15	57.2 ▲ 1.7	▼ -4.7
		(TOCOM/中部)	2/15	- -	- -
	小売 [週動向] (資工庁公表)	2/15	121.8 ▲ 1.7	▼ -7.1	

※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

灯油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	2/7 ~ 2/13	432 ▲ 100	▲ -	
	輸入	"	n.a. n.a.	n.a.	
	出荷	"	532 ▲ 18	▲ -	
	輸出	"	30 ▲ 10	▲ -	
	在庫	2/13	1,729 ▼ -131	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	2/9 ~ 2/15	55.2 ▲ 1.7	▼ -2.1	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	2/9 ~ 2/15	53.6 ▲ 1.4	▼ -1.0
		(TOCOM/中部)	2/15	54.5 ▲ 0.5	▼ -2.2
	小売 [週動向] (資工庁公表)	2/15	84.6 ▲ 1.3	▼ -8.5	



■ 関連情報

1 海外/原油

2月17日のNYMEXのWTI先物原油は、3営業日続伸、60ドル台維持し、昨年1月以来約1年ぶりの高値を更新した。連休以来のテキサス州を中心とする寒波襲来で、製油所出荷やパイプライン輸送に供給障害が発生しており、買い優勢で続伸した。ただ、前日の観測報道に続き、米紙も、サウジが4月以降の減産緩和を検討中と報じたことで、売り込まれたが、その後、サウジのアブドゥルアジズ・エネルギー相が、新型コロナへの勝利宣言は時期尚早との慎重な発言で、上げ幅を拡大した。なお、米国エネルギー情報局(EIA)の週間在庫報告は休日の関係で、翌日の発表。3月限の終値は前日比1.09ド

ル高の61.14ドル、4月限の終値は同1.08ドル高の61.16ドル。

EIAによると、2月15日時点のガソリンの小売価格は、前週比4.0セント値上がりの1ガロン2.501ドル(70.0円/ℓ)、ディーゼルは同7.5セント値上がりの2.876ドル(80.5円/ℓ)となった。ガソリンは12連続の値上がり、ディーゼルは15週連続の値上がりだった。

2 国内/製品需給 (1) 出荷

石連週報によれば、2021年2月7日～2月13日に休止したトッパー能力は40.6万バレル/日で、前週に対して11.3万バレル/日増加した(全処理能力は345.8万バレル/日)。

原油処理量は297.8万klと、前週に比べ3.6万kl増加。前年に対しては21.0万klの減少。トッパー稼働率は77.4%と前週に対して0.9ポイントの増加、前年に対しては4.0ポイントの減少となった。

生産は前週に比べてガソリン、ジェット、C重油が減産、その他の油種で増産となった。ガソリン/0.6%減、ジェット/6.7%減、灯油/30.1%増、軽油/3.3%増、A重油/8.0%増、C重油/6.6%減。今週のC重油の輸入は3.5万kl(前週比7.3万kl減)。軽油の輸出は6.9万kl(前週比4.4万kl増)。

出荷(輸入分を除く)は前週比で灯油が増加、その他の油種で減少となった。前年比ではガソリンが減少となり、その他の油種で増加となった。ガソリンの出荷は80.9万kl(対前週8.7%減)と2週振りに減少した。ジェット4.4万kl(対前週7.1%減)、灯油53.2万kl(対前週3.6%増)、軽油60.3万kl(対前週8.8%減)、A重油24.1万kl(対前週3.5%減)、C重油24.8万kl(対前週6.1%減)。

(単位:千kl)

	今週 (2/7 ~ 2/13)	前週 (1/31 ~ 2/6)	前週比
ガソリン	809	887	▼ -78 (-9%)
ジェット燃料	44	48	▼ -4 (-8%)
灯油	532	514	▲ 18 (4%)
軽油	603	661	▼ -58 (-9%)
A重油	241	250	▼ -9 (-4%)
C重油	248	265	▼ -17 (-6%)
合計	2,477	2,625	▼ -148 (-6%)

※今週出荷量 = (前週末在庫 + 今週生産 + 今週輸入) - (今週輸出 + 今週末在庫)

2 国内/製品需給 (2) 在庫

2月13日時点の在庫は、ジェット、軽油、A重油で積み増しとなり、その他の油種で取り崩しとなった。

ガソリンは198.6万kl、前週差2.1万kl減。前年に対しては30.3万kl多い。

灯油は172.9万kl、前週差13.1万kl減。前年に対しては7.0万kl少ない。

軽油は159.5万kl、前週差0.7万kl増。前年に対しては1.9万kl少ない。

A重油は74.2万kl、前週差0.9万kl増。前年に対しては1.4万kl多い。

C重油は180.5万kl、前週差3.8万kl減。前年に対しては9.9万kl少ない。

(単位:千kl)

	今週 (2/13)	前週 (2/6)	前週比
ガソリン	1,986	2,007	▼ -21 (-1%)
ジェット燃料	739	705	▲ 34 (5%)
灯油	1,729	1,860	▼ -131 (-7%)
軽油	1,595	1,588	▲ 7 (0%)
A重油	742	733	▲ 9 (1%)
C重油	1,805	1,843	▼ -38 (-2%)
合計	8,596	8,736	▼ -140 (-1.6%)

3 国内/製品卸売価格 (1) 元売会社 仕切価格改定動向

2月9日～15日の指標原油価格は前週(2月2日～8日)比で大きく値上がりし、為替レートはわずかに円高で、円建ての原油コストは大きく値上がりしたと見られる。

これを受けて、次週の大手元売卸価格は、ガソリン・灯油・軽油ともに、全社、前週比1.5円の値上げとなった。

3 国内/製品卸売価格 (2) 業転価格・先物価格動向

2月9日～15日の製品スポット市況は、2月2日～8日平均と比べ、全油種・全取引で値上がりした。

直近(2/9～2/15)の陸上スポット価格平均値(千葉・川崎・中京・阪神の4地区の陸上ラック価格)は、前週比で、ガソリンは1.6円の値上がり、灯油も1.7円の値上がり、軽油も1.7円の値上がりだった。直近週(2/9～2/15)において、ガソリンは105～107円台で大きく値上がり、灯油は53～55円台で大きく値上がり、軽油は53～56円台で大きく値上がり後わずかに値下がりして推移した。

東京湾渡しの海上スポット平均価格は、直近週(2/9～2/15)に、前週比で、ガソリンは1.9円の値上がり、灯油は1.2円の値上がり、軽油は1.9円の値上がりだった。海上スポット価格は、同期間(2/9～2/15)に、ガソリンは106～108円台で大きく値上がり後横ばい、灯油は53～54円台で値上がり後ほぼ横ばい、軽油は55～57円台で大きく値上がり後横ばいで推移した。

先物価格の平均は、前週比で、ガソリンは1.5円の値上がり、灯油は1.4円の値上がり、軽油は1.7円の値上がりだった。先物価格は、同期間(2/9～2/15)に、ガソリン104～106円台でわずかに値下がり後大きく値上がり、灯油52～54円台で値下がり後大きく値上がり、軽油56～58円台でわずかに値下がり後大きく値上がりして推移した。

(RIM) (単位: 円/%)

陸上ローリー 4地区平均]	今週 (2/9～2/15)	前週 (2/2～2/8)	前週比
	レギュラー	52.8	51.2
灯油	55.2	53.5	▲ 1.7
軽油	55.3	53.6	▲ 1.7

(TOCOM) (単位: 円/%)

[期近物/終値] [平均]	今週 (2/9～2/15)	前週 (2/2～2/8)	前週比
	レギュラー	51.2	49.7
灯油	53.6	52.2	▲ 1.4
軽油	57.2	55.5	▲ 1.7

※上記価格は税抜き価格

参考値 (2/9～2/15実績値) (単位: 円/%)

油種	現物	先物	平均
ガソリン	▲ 1.6	▲ 1.5	▲ 1.5
灯油	▲ 1.7	▲ 1.4	▲ 1.5
軽油	▲ 1.7	▲ 1.7	▲ 1.7
A重油	▲ 1.8		

(出所) 現物: RIM社陸上ローリー4地区平均価格

(千葉・川崎・中京・阪神)

先物: TOCOM京浜地区海上バージ渡し平均価格

4 国内/製品小売価格

2月15日時点のSS店頭価格は、ガソリンが前週(2月8日)比1.8円高の141.4円、軽油も同1.7円高の121.8円、灯油は18%ペースで同24円高の84.6円(1%ペースでは同1.3円高の84.6円)。ガソリンは12週連続の値上がり、軽油も12週連続の値上がり、灯油も12週連続の値上がりだった。

ガソリンについて、都道府県別には、値上がりは46都道府県、横ばいはなし、値下がり1県だった。全国最安値は133.6円の徳島県(前週比1.4円高)、その次に安かったのは136.0円の岡山県(同1.9円高)、最高値は149.8円の鹿児島県(同1.5円高)だった。最も値上がりしたのは同3.8円高の愛

知県(141.7円)、横ばいはなし、値下がりしたのは同0.9円安の和歌山県(138.8円)だった。

今週(2月9日～15日)は、指標原油価格が大きく値上がりし、為替レートはわずかに円高だったが、円建ての原油コストは大きく値上がりしたと見られる。次週(2月18日～24日)適用の元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに、全社、前週比1.5円の値上がりとなった。次回調査時(2月22日)のガソリンの小売価格は、値上がりが見込まれる。

(資工庁公表) [週動向] (単位: 円/%)

	今週 (2/15)	前週 (2/8)	前週比	直近高値
レギュラー	141.4	139.6	▲ 1.8	08/8/4 185.1
灯油	84.6	83.3	▲ 1.3	08/8/11 132.1
軽油	121.8	120.1	▲ 1.7	08/8/4 167.4

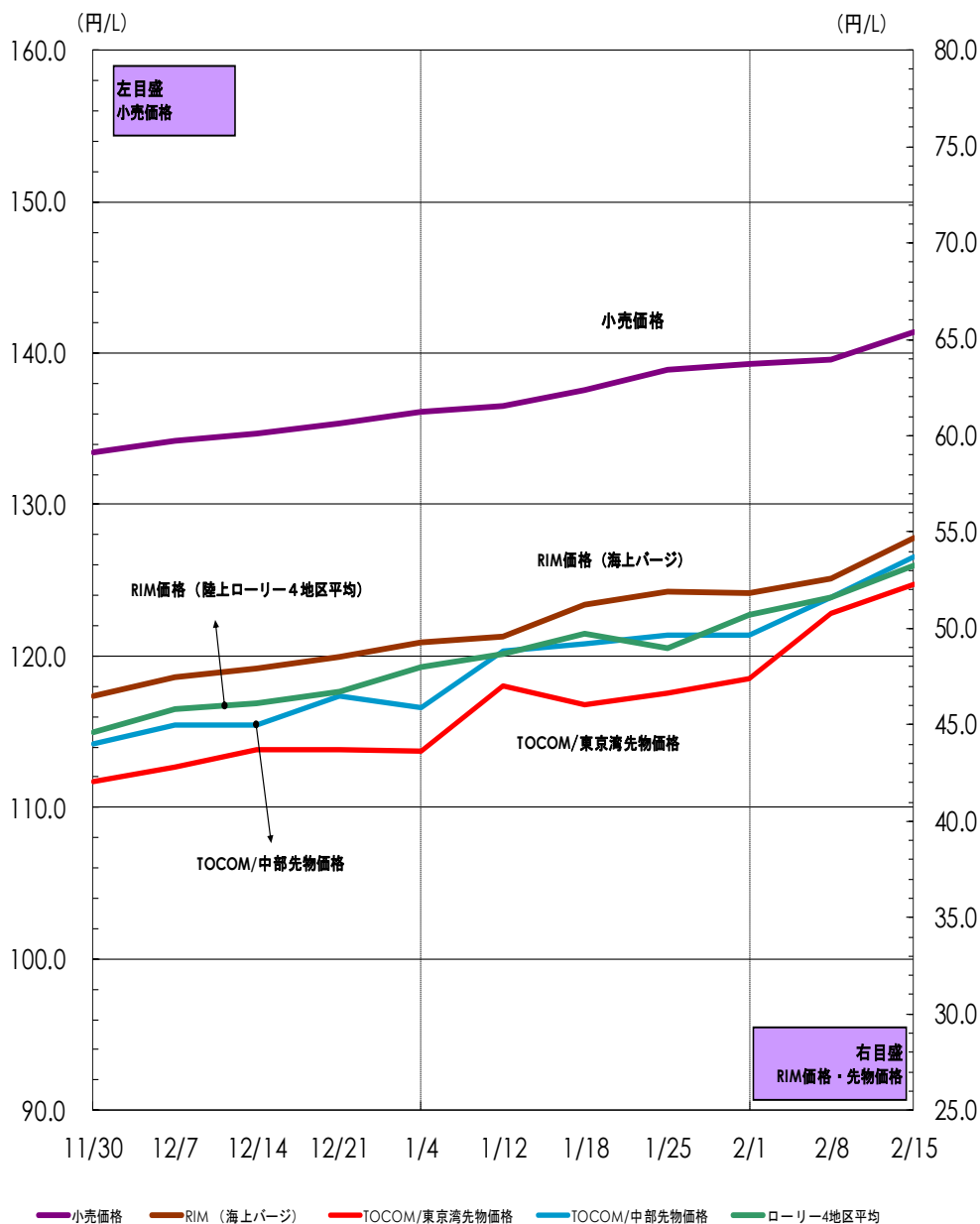
※ 現金一般価格の全国平均値 (消費税込み)

07年4月以降 2,000店舗を対象。

直近高値とは2003年10月以降の最高値。

ガソリン価格推移

(2020/11/30 ~ 2021/2/15)



(注)①「小売価格」は消費税込みの価格 RIM価格・TOCOM先物価格は税抜き価格
 ②RIM価格(陸上ローリー)は4地区平均価格

■ お知らせ

本レポートは当センターのホームページ (<https://oil-info.ieej.or.jp>) にも掲載しています。
次回(2020第33号)の公表は、2/26(金)14:00です。

「セルフSS出店状況」(令和2年3月末現在)は、8月26日(水)14:00に公表しました。当センターのホームページをご覧ください。

本レポートのご利用について

本レポートについて、テキスト、グラフィックス及びその他の情報(以下、併せて「ドキュメント」)に関わるすべての知的所有権は、一般財団法人日本エネルギー経済研究所石油情報センター(以下、当センター)又は当センターヘドキュメントを提供している第三者へ独占的に帰属します。
当センターの事前の書面による承諾を得ることなく、ドキュメントを転用、複製、改変等の一切を固く禁じています。
また、ドキュメント内容に関しては万全を期していますが、その内容の正確性および安全性を保証するものではありません。

「ウィークリー オイル マーケット レビュー」とは

平成16年5月に経済産業省資源エネルギー庁資源・燃料部石油流通課 主催の「石油製品市場動向研究会」が取りまとめた中間報告で、「わが国石油産業における市場機能、価格発見機能が更に強固なものとなることが望まれるとともに、中期的な課題として、石油産業において確立していく市場機能、価格発見機能に基づく合理的な価格認識及びそれを踏まえた自己責任の下での経営判断の必要性について、石油産業関係者の認識が更に深まることにより、わが国の基幹産業である石油産業全体としての合理性、活力が一層高まることを期待したい。」と提案されています。
当センターでは、これを受けて石油連盟、全国石油商業組合連合会をはじめ関係機関等の協力を得て、石油関係者、企業の経営者層(特に給油所経営に携わる方々)から一般消費者の方々に対し、原油・石油製品需給や価格動向を的確に理解するツールの一つとして、「ウィークリーオイルマーケットレビュー」を平成17年5月より定期的に発信しています。

本レポート掲載データの出所について

①【原油・石油製品需給】〈石連週報〉

石油連盟(石連)「原油・石油製品供給統計」週報データを千KL単位に換算して採用。
「出荷」は当センターの推計。

②【原油・先物価格】〈WTI原油、中東産原油〉

WTI原油は、ニューヨーク商業取引所(New York Mercantile Exchange : NYMEX) WTI原油先物の期近物・終値を採用。

中東産原油は、東京商品取引所(The Tokyo Commodity Exchange : TOCOM) 中東産原油の期近物・終値を採用。 ※「二番限(翌月限)」

中東産原油は、ドバイ原油及びオマーン原油の平均価格を指標としている。為替換算レートとして、三菱東京UFJ銀行発表TTM(Telegraphic Transfer Middle rate : 中値)を採用。

原油CIF単価は、財務省貿易統計「原油・粗油平均CIF単価」(旬間値)を基に、石油連盟が試算したドル表示の参考値を採用。

③【国内製品・元売仕切価格】

元売仕切価格は、元売会社(一次卸)と系列特約店など(二次卸)との間で売買される卸価格。

元売会社は、平成22年4月以降、現行の新価格体系を見直し、原油や製品相場、他社仕切りなどの動向を総合的に判断し、具体的方針を決める方式に変更。さらに平成26年6月以降、原油コストをより重視する方式に変更している。

④【国内製品・業転価格】〈RIM業転〉

国内陸上ローリー価格は、リム情報開発株式会社(RIM)「LORRY RACK・レポート」の千葉、川崎、中京、阪神の4地区の平均値を採用(いわゆる4RIM価格とは異なる)。

⑤【国内製品・先物価格】〈TOCOM〉

TOCOM 東京湾 及び中部石油製品期近物・終値を採用。

TOCOM東京湾は京浜地区海上バージ渡し価格(平均値)、TOCOM中部は中部地区陸上ローリー渡し価格(平均値)。

⑥【国内製品・小売価格】〈週動向調査〉

約2,000SSを対象に週次ベースのSS店頭における店頭現金価格の全国平均値を採用(資工庁公表)。原則として、毎週(月)時点の価格を調査し(水)14:00に公表(資源エネルギー庁HPに掲載)。